

第9回死刑映画週間 2020年2月15日(土)~2月21日(金)

# 倒錯した「真理」と死刑制度

映画 (監督 制作年) × 語る人 (一回限り、裏面参照)

## 『金子文子と朴烈』

(イ・ジュンイク 2017) × 石川優実

©2017, CINEWORLD & MEGABOX, JOONGANG PLUS M. ALL RIGHTS RESERVED



## 『友罪』

(瀬々敬久 2018) × 瀬々敬久

© 瀬々敬久 集英社 ©2018 映画「友罪」制作委員会



## 『デビルズ・ノット』

(アトム・エゴヤン 2013) × 柳下毅一郎

©2013 DEVILS KNOT LLC. ALL RIGHTS RESERVED



## 『フォンターナ広場』

(マルコ・トユリオ・ジョルダーナ 2012) × 小倉利丸

© 2012 Cattleya S.r.l. - Babe Films S.A.S



## 『眠る村』

(齊藤潤一・鎌田麗香 2018) × 齊藤潤一

© 東海テレビ



## 『39 刑法第三十九条』

(森田芳光 1999) × 香山リカ

© 松竹 光和インターナショナル



## 『抵抗 死刑囚の手記より』

(ロベール・ブレッソン 1956) × 太田昌国

collection Gaumont



## 『霧の旗』

(山田洋次 1965) ©1965 松竹株式会社

渋谷

ユーロスペース

東京都渋谷区円山町1-5 KINOHAUS 3F

「真理省」の壁に「戦争は平和、自由は隷従、無知は力」なるスローガンが掛かる  
或る国の〈架空の〉物語を書いたのはジョージ・オーウェルだった。  
「こんな馬鹿なことが起こるわけではない。フィクションだから可能な世界だ」  
—— 該当する時代を知らない人はそう考えがちだ。だが、  
私たちがいま住む社会ではこのスローガンが〈真理〉として通用していないか。  
死刑についてはどんな「真理」が語られているだろうか？  
「人を殺したからには死刑は当然」「国家が死刑の権限を持つのは当然」  
——ここに集う8本の映画を観て、私たちは別な「真理」を掴み取ることができるだろうか。